

衣生活に関連したものづくりを通して「学び」について考える - 「こどもまつり」における「学びの企画」への参加を念頭に -

プロジェクト構成員

中 あゆみ，藏本聖子，池本佳織，出水加奈子，平田陽子，
矢野 梓，河合沙織，望月春加，山田ゆかり

指導教員

今村律子（教育学部）

【演習の背景・目的】

小学校家庭科の目標には、「衣食住などに関する実践的体験的な活動を通して」種々の知識や技能を身につけることが推奨されている。最近の子どもたちはものづくりなどを体験する機会が少ないので、私たちがそのような場を提供し、それによって、このような行事を設定できる企画能力も身につける。

また、低・中学年の小学生には家庭科という教科が存在しないが、そういった子どもたちに衣生活への関心をもってもらうにはどうすればよいか、どのような内容を扱えばよいかを勉強し、家庭科、特に被服の分野を中心に教材開発について学ぶことも目的である。

これらの企画を計画し、実行していく上で子どもとのふれあいや、ものづくりの楽しさを体験し、子どもたちへ臨機応変に対応できる力も身につける。

【演習の実施方法】

昨年度、被服学研究室を中心に実施した「こどもまつり」への企画出展内容を今年度も活用し、ものづくりを学びの企画としてさらに発展させていった。（和歌山大学教育学部『学芸』第50号、pp. 89-102 参照）

昨年度は、学びの企画として、会場に「クイズコーナー」を設け、ものづくりとともにクイズを楽しみながら、私たちの生活に身近に存在する織物や編物に関心を持ってもらおうとした。しかし、作品の製作準備にかなりの時間を要し、クイズコーナーの企画検討を十分に行うことができなかった。加えて、子どもたちの作品製作にどの程度の時間がかかるのか予測できず、クイズコーナーをうまく機能させることができなかった。今年度は、この点に配慮し、具体的には、子どもたちの動線や会場（教室）のレイアウトなどを検討した。

また、織り機の台数不足や作品製作に必要な手芸用品についても見直しをし、ものづくりだけで終わらないように検討した。

【演習の成果】

「こどもまつり」の準備、当日、反省から、気付いたことや学んだことは次の通りである。

事企画・運営に関して

・午前中は子どもが少なかったが、午後は予約でいっぱいになり、参加できない子どももいた。

前の宣伝により午前にも多くの子どもに来てもらうとともに、参加できない子が出ないように工夫する必要がある。



午後の様子。入りきらなくなり、新たに島(机)を設けた。

- ・あみぐるみで何を作るか自由だったが、自由に作るのは難しそうだったため、いくつかのパターンを作っておき、その中から作りたいものを選んでもらうようにしたほうがよかったのではないか。



作品例。応用作品もあり、子どもが時間内に作れる例は少なかった。

- ・クイズの順番は、子どもに身近な順に出したほうがよかったのではないか。
- ・十分に準備していたつもりでも、予期していなかったことが起こり、臨機応変に対応する力を要した。
- ・企画を考えることができ、またその難しさを学ぶことができた。
- ・編機や織機の作り方の配布プリントを作っておけば、家で作ることができる。

子どもに関する発見・気付き

- ・子どもはものづくりが大好きで、できた作品をうれしそうに見せてくれる。
- ・幼い子どもでも最後まで自分で作り上げていた。子どもたちが好きなことをしているときは驚くような集中力を持っている。
- ・大人が思いつかないようなセンスを持っている。



赤茶色の胴体に黄色の耳、これは一体何だろう…。

教材・教えることについて

- ・説明するときに、実際の編機・織機を使ったが、説明用に大きい器具を用意しておけばもっとわかりやすく説明できたのではないか。
- ・教育実習の経験がない1，2回生は子どもに合わせた説明が難しい。教え方や言葉づかいにも工夫が必要である。
- ・子どもの目線で接し、子どもとともに学ぶことができた。

【今後の検討課題】

昨年度の反省から、今年度は3部に区切り予約制にしたが、これもまた時間通りに来ない子どもがいたり人数制限のために参加できなかった子どもが出てきて、うまくいかなかった。これは会場の教室の広さから考え直す必要があると考えられる。しかし、階段状になっている大講義室で子ども一人ひとりに目を向けて教えられるかどうか、検討しなければならない。そのためにはスタッフ不足も問題となってくる。

今回、1、2回生は準備段階から当日も、よく考え、頑張って実践していた。そのことは、今後の教育実習や、実際の教育現場に立っても役に立つだろう。しかし、こどもまつりで初めて子どもと接した学生もあり、子どもとの接し方も、事前に自主演習の中で学習しておいたほうがよいかもしれない。

また、クイズは再検討が必要である。子どもたちに楽しみながら身近な衣生活に興味を持ってもらいたいが、製作の前にクイズをしても、ものづくりや身の回りの生活に結びついていないのではないだろうか。ものづくりを楽しんでもらえることはうれしいが、ものづくりだけで終わることなく、子どもたちの身近な衣生活につなげていけるクイズを作らなければならない。しかし、他の方法でそれが可能ならば、クイズにとらわれずに新たな企画を加えてもいいだろう。今後のもっとも大きな課題といえる。